

別冊 おおいしだものがたり

～資料館資料編～

「開館40周年記念企画展 写真と古文書で見る大石田の歴史」展より

「百聞は一見に如かず」という言葉があります。どれほど多くの伝聞も実際に一目見ることには及ばないという意味ですが、これは前漢時代の故事に由来するものです。この言葉が今でも慣用的に用いられているのは、情報量と確実性において、視覚が重要な役割を果たしているからではないでしょうか。それは歴史の分野でも当てはまります。一つの発見が、謎を解明し、論争を決着させ、それまでの常識を塗り替えてしまったという例は少なくありません。そんな歴史的大発見ばかりでなくとも、歴史について考えるとき視覚情報が求められる場面があります。



例えば、昔の人々の様子を聞かされ、または文献で読んだりした時などはどうでしょう。当時の様子を思い浮かべようとしても、なかなか細部までは掴み切れません。なんとか想像力を振り絞ってみても、どこかぼんやりとしてリアリティに欠けた、何とも希薄なイメージが出来上がってしまいます。大石田は最上川舟運の町であったと至る所で紹介されます。しかしその実際の有り様や、川と結びついた人々の暮らしにまで意識を向けられることはあまりありません。というのも、米俵を満載した舟を私たちの日常で目にするのではなく、高い堤防によって川と町並みが分断した様子からは、川と綿密に関わっていた当時の暮らしの面影を偲ぶことは困難だからなのです。そんな時、私たちの想像を補ってくれるのが視覚情報としての写真です。

今回資料館で展示している写真は明治末から昭和初期のものが中心です。江戸時代から若干の隔たりはあるものの、川の様子や家並みは、より当時の趣を遺しています。岸につけられた小鵜飼舟や市の賑わい、雪をうず高く積んだ通りの様子などは写真家が芸術として撮影したものではなく、いわばスナップ写真のようなものです。しかし、だからこそ人々の暮らしの一コマ一コマが活写され、想像の過程で取りこぼしてしまう現実感をありありと示してくれています。

「百聞は一見に如かず」には、実は後世に付け加えられた続きがあります。「百見は一考に如かず」。今回は写真と共に、大石田に遺された古文書も展示しています。写真以前の人々の暮らしの様子が垣間見えるような史料を選びました。写真と古文書によって「聞」と「見」を補完し合いながら、「一考」に繋げていただければ幸いです。

開館40周年記念企画展「写真と古文書で見る大石田の歴史」は平成31年2月11日（月）まで



町の人口 平成30年12月1日現在		
世帯数	2,343戸	(-4)
総人口	7,132人	(-14)
男	3,495人	(-1)
女	3,637人	(-13)
(11月中の異動)		
出生	3人	転入 7人
死亡	12人	転出 12人

※この人数は外国人も含めたものです。

楽がき帳

セリフがなかなか覚えられなかったり、当日午前中のリハーサルでも出番を忘れたり、本番まで不安が尽きないなか、なんとか無事にプロジェクト「虹」の第1回公演を終えることができました。想像していたよりもはるかに多くの方に来場いただきました。個人的な反省点はいっぱいあるのですが（お昼に弁当を食べすぎたとか）、納得いく舞台になったと思います。見に来てくださった皆さま、ありがとうございました。

今年も残すところあとわずか。来年こそは痩せようと思います。皆さん、よいお年を。

(あ)